

【能動的ホリデイ】

第01稿

脚本：勝見風太

登場人物

宮津遥

(25)

建築事務所に勤める設計士

役者名

伊根晶

(25)

宮津の同僚で建築デザイナー

役者名

役名

(18)

役の紹介文

役者名

| | |
|---|--|
| 1 | <p>アパート・宮津の部屋</p> <p>真っ暗な暗転の中、宮津の声でモノローグ。</p> <p>宮津「ある日、世界から色が消えた」</p> <p>真っ黒な画面からゆっくり、真っ暗なアパートの中の部屋にシーンが変わる。（ここからラストシーン前まで画面がずっとモノクロ）</p> <p>「ピンポーン ピンポーン」とチャイム。それに「おい、宮津！俺だよ、伊根だよ。来たぞー」と声。</p> <p>部屋の中で大きな影。宮津がゆっくり起き上がって、部屋のドアを開ける。</p> |
| 2 | <p>アパート・廊下</p> <p>宮津「……本当に来たのか、伊根……」</p> <p>伊根「俺が来るつつつて来なかった時があったか？」</p> |

| | |
|-----------|---|
| 3 | <p>どんよりした表情の宮津と、笑ってはいないがサツパリした感じの伊根。</p> <p>伊根「着替えろ。いや、着替えなくていいや、財布とケータイだけ持って、とにかく来い、いーから」</p> <p>宮津「ちよちよちよ……引っ張るな、おい、おいって……」</p> |
| アパート・前の道路 | <p>スウェットの袖をぐいぐい引いてアパートの廊下を抜け、階段を降りて、路上に停めてある自分の車（日産Be-1）に宮津を押し込む伊根。</p> <p>助手席に宮津を乗せて、エンジンをかける伊根。</p> <p>宮津「いたた……ど、どこ行くんだよ」</p> <p>伊根「LINEで言ったらろ」</p> <p>サイドブレーキを下ろしてDにシフトを入れてから、宮津の方を向いて一拍置き、</p> <p>伊根「どこでもない場所、だよ」</p> |

| | |
|---|---|
| 4 | <p>と言ってから、車を出す伊根。 車通りの少ない路地を走り出す車、 カメラが上にPANすると、空に「能 動的ホリデイ」のタイトルコール。</p> <p>高速のIC入口</p> <p>一般レーンに入って発券を受け取る 伊根。カーラジオがお昼の情報番組 を垂れ流している。</p> <p>宮津「なんだよ、その、『どこでもない場 所』って……」</p> <p>伊根「着いてからのお楽しみだ」</p> |
| 5 | <p>高速道路</p> <p>加速して本線に合流する車。</p> <p>伊根「あ、そうだ。後ろの席に飲みもんある から取ってくれ」</p> <p>そう言われ、助手席を少し倒して後 部座席を探る宮津。シートの上に描 きかけのデザイン画が缶ジュースの 下敷きになって置いてあるのを見 て、</p> |

宮津 「おいおいおい……これ仕事のやつだ

ろ、こんな乱雑に……」

伊根 「いいんだよ少しくらいシワ寄ったつ

て」

散らかったスケッチをまとめてケースに入れ、シートに放ってあったジュースの缶を2本持って助手席のシートを戻してから、

宮津 「お前がよくても俺が嫌なの。伊根のデ

ザイン見ながら設計するの、楽しみなんだからさ」

と呟く宮津。そう言われて、片方の頬を膨らます伊根。普通の顔に戻ってから、

伊根 「水色のがブルーハワイで、ピンクのがイチゴだ」

と説明するが、宮津の白黒の視界では区別がつかず、

宮津 「どつちがどつちだ……」

伊根 「あ……悪い、右のがイチゴだ」

ホルダーにドリンクを入れてから、宮津は景色を見渡すが、全てがモノ

クロに見える風景にため息をついて、窓際に肘を立て頬杖をつく。それを見た伊根は手元を操作して、助手席側の窓を、急に少しだけ下げる。

宮津 「うわ!？」

驚く宮津、伊根はハンドルに手を戻して、

伊根 「宮津、いま仕事のこと考えてただろ」

宮津 「……なんで……」

伊根 「分かるって、いつつも会社でおんなじポーズとってるからよ」

前を走るトラックが邪魔で、ウインカーを出して追い越す伊根。

伊根 「今日はその肘ナシな!仕事のこと一切考えんな。……多分な、お前の目起こった現象は、仕事のストレスが原因だ」

宮津 「……別に、無理してたわけでもないし、楽しんで働いてると思うけど……」

伊根 「楽しいのが無理してない証拠になんのか?」

宮津「……」

再びウインカーを出して本線に戻る
Be-1。

伊根「おれんち会社から近けーからさ、夜に
散歩してると見えんだよ、お前んとこ
のデスクのあたりがぼんやり明るい
の。」

定時で帰ってるなんて嘘つきやがっ
て……いいか、今日は休日だ、それ
も、いつもとは違う休日にする。今
日はな、能動的ホリデイだ」

宮津「?……なんだよ、それ?」

伊根「読んで字の如く、能動的な休日だよ。」

きゆうじつ、つつーとなんか収まりが
悪いからホリデイにした」

宮津、ちよつと笑って。

宮津「出たよ、伊根さんお得意の、微妙な事
柄に独特な名前つけるやつ……」

と茶化すが、伊根は笑わないまま、

伊根「宮津、休みの日つつたら何して
る?」

と宮津に尋ねる。

宮津 「ええ……？」

伊根 「休みの日、休日だよ。何してんだ？」

宮津、考えるいつものクセで、つい肘をつこうとして、はっとして腕を所在なげに下ろしてから、

宮津 「……特に、何もしてないよ。寝てる

か、ネットでニュース見たりと
か……」

伊根 「やっぱりな。今まで訊いたことなかつ

たけどそんなこったろうと思った。いか、あのな、そんな受動的な休日の過ごし方はマイナスをゼロにする作用しか生まねーんだ。プラスまでは絶対にいかねえ。能動的ホリデイってのはゼロをプラスに押し上げるための休日の作り方だ」

伊根がそこまで言い終わるまでに、追い越し車線から黄色いカマロが、勢いよくBe-1を抜かしていく。

宮津 「ふうん……で、具体的に何をするんだよ」

伊根、喧しいラジオを切って、前を
向いたまま、

伊根「お前は、自分の人生が苦しいもんじゃ
なきやいけねーと思ってる」

と言いつつ。不意をつかれた宮津は
伊根の顔をぱつと見るが、すぐに目
線をサイドミラーのあたりに戻す。

伊根「俺はさつき、お前の目の現象を仕事の
ストレスだつったけど、本当はもつ
と根深い、俺が知らないお前の過去に
原因があるんじゃないか？」

宮津「……何でそんな事、分かるんだよ」
伊根「わかんねーよ」

理由を聞こうとした矢先にあつさり
諦められて、拍子抜けした顔でまた
伊根の方を見てしまう宮津。

伊根「わかんねーけど、感じんだよ。手の洗
い方、ジャケットの着方、ドアの閉め
方、ビールの飲み方。話さなくても、
言葉以外のお前が俺に何かを訴えてく
る事がたまにある。2年間一緒に仕事

してきた中で積み重なってきた、俺の
勘がそう言ってたんだ」

宮津 「勘って……」

伊根 「疑うのか？俺の勘とか感覚が確かなも
んだって事は、お前が一番よく知って
んだろ」

宮津 「……そうだな、伊根が上げてくるデザ
インスケッチが没になった事、一回も
ないしな……」

後部座席の、ケースに入ったスケッ
チをカメラが一瞬映す。

伊根 「宮津、お前は真面目すぎんだよ。誰の
お荷物にもならないように生きたいの
は分からなくもないし、お前はほぼそ
れを成功させてる。だけどその為に捨
てるものが多すぎる。非効率だろ、
論理的なお前の性にあってねえよ」
宮津、伊根の顔をチラッと見て、
黙ったまま左の肘を右手で掻きだ
す。

伊根がアクセルを踏み込む、速度計の針が80、90、100と回っている。

伊根「あのな、自分を律するのと、罰するのは全然違う事だぞ。……お前はきつと、過去に起きたことに謝っていれば許されると思っっている」

宮津の肘を搔く手が速くなっている。

伊根「だけどな、謝ってもどうにもならねー事だつてあんだよ。そういう事からは、離れるしかねーんだよ。完璧に綺麗な人生なんか無えし、綺麗にしようとするほどの、元がどんだけ汚かったのかを証明することになっちまうんじゃないか？」

そこまで言われ、やおら大きく鼻から息を吸い込んだ宮津は、肘から離れた右手を伸ばして、カーラジオのスイッチを入れる。賑やかな番組が再び流れ出し、伊根は突然のことに

| | |
|-----------|--|
| 6 | |
| 高速道路・トンネル | <p>ポカンとした表情でしばらく宮津の方を見つめる。</p> <p>伊根、そろそろと手を伸ばし、ラジオのスイッチを切る。宮津がまた入れる。伊根が切る。宮津が入れる。</p> <p>伊根が切る。宮津が入れる。</p> <p>伊根が切ろうとして、ちよつと考え、手を戻す。</p> <p>宮津「……分かつてるよ」</p> <p>静寂を破って宮津が呟く。</p> <p>宮津「お前なんか言われなくても、分かつてるよ、そんな事……」</p> <p>緊張したように声が震えている。そのタイミングで、Be-1がトンネルに入る。</p> |

オレンジ色の明かりが規則的に窓の外を通過するトンネル内。伊根はハンドルを握って前を向いている。宮津はそっぽを向くように、力を込めて窓際に顔を向けている。ラジオは

トンネル内のために、砂嵐のノイズを流している。

宮津 「謝って、謝って、もう何がどうで、どうしてこんなに辛いのかも分からな
い。思い出すたびに辛さだけが分離して重ね塗りされてくみたいなんだよ。
でも仕方ない。俺にはそれしかないんだ。どうしようもない事に対する償いと、罪悪感を紛らわす為の仕事。それが俺の、生きてる意味なんだよ」

伊根が宮津の方を見る。表情を直接伺う事はできないが、窓に反射した宮津の口元が歪んでいる。

宮津 「一生そうやって、働いて謝る機械になって過ごせればよかった。でもそれも無理なんだ。どこかで安心したがってる、ふっと人心地がつく時がある。俺は、中途半端なんだ。あの時からずっと変わってない。どうしようもなく中途半端だから、色だけを失ったんだ。いつそのこと、失明でもすればよかったのに……」

窓の外を明かりが通るたびに、反射

した宮津の表情が光にかき消され

る。途切れ途切れに映る口元の横

を、涙が少しだけ伝う。

それを見た伊根が、ダツシユボード

からティツシユを出して宮津に渡

す。そして、

伊根 「やつと、言葉で話してくれたな」

と言い出す。

伊根 「宮津、色々ほざいてごめん。色が見え

なくなっただって「LINE」で言われた時

さ、感じたんだよ。このまま放つとい

たら、こいつ、次は光まで見なくなっ

ちまうなって」

宮津 「それも、2年間の勘か？」

伊根 「そうだ。それで、なんとかしたかった

んだよ。お前以外に、俺のスケッチを

理解して、設計に起こしてくれるやつ

なんて居ねーからな」

宮津 「……そうかな？」

伊根 「そうだよ」

宮津 「……そうか」

7

高速道路・サービスエリア

伊根 「……俺が考えついて言えることはもう

全部言った。あとはお前が好きにして
くれ、いつもの、仕事してる時みたい
によ」

宮津 「……いいのか？」

伊根、少しだけ考えて。

伊根 「……ああ、いいよ。……もう、いい
よ」

それを聞いた宮津は、伊根の横顔を
ゆっくり見上げて、眩しそうに顔を
くしゃつとさせ、

宮津 「……そうかな」

伊根 「そうだよ」

宮津 「そうか……うん」

背もたれにもたれて、涙が落ちない
ように天井を見上げる。
トンネルを抜け、ラジオが再び入
り、軽快なバラエティ番組のトーク
が流れ出す。

| | |
|---|---|
| 8 | <p>左にウインカーを出して車線変更し、海と砂浜を臨めるサービスエリアの駐車場に「Bee」を停める伊根。</p> <p>伊根 「忘れてただろうけど、着いたぞ。ここが『どこでもない場所』ってやつだ」</p> <p>宮津 「……サービスエリアじゃないか」</p> <p>伊根 「そうだ。充実した建物でありながら、ここ自体が最終的な目的地になることはほぼ無い。永遠に経路の途中として存在であり続けるから、『どこでもない場所』と自分は呼んでる……って言うってたタレントがいて、それが気に入ったから、俺もそう呼んでる」</p> <p>宮津 「なんだそりゃ……」</p> <p>伊根 「なんか分かるような気がしねえか？」</p> <p>宮津 「それは……どうかな」</p> <p>くだらないやり取りをしながらレストランコーナーに入っていく二人。</p> <p>サービスエリア・レストラン</p> <p>食券を買う宮津と伊根。宮津は山菜そば、伊根はオムライスを注文し、</p> |
|---|---|

料理をそれぞれ食べ出す。静かにそばを啜る宮津に対して、はぐはぐとがつついてオムライスを平らげる伊根。その伊根の様子を見て、やおらそばを勢いよくゾッゾッと食べ出す宮津、力強く噛んで、出汁までグーッと飲み干してしまう。その様子を、口の端にケチャップをつけたまま、呆気にとられて見る伊根。

宮津 「ふうっ……は、はは……」

伊根の視線に照れ、笑って誤魔化す宮津。

宮津 「ちよつと、抜け出してみようかと思っ
てさ、自分を。……急に全部は無理だ
けど、こういうところから少しずつ
な」

伊根 「……そうか」

宮津を見て笑う伊根。それに対して、「つぶ」と軽いゲップをして、また伊根に笑われる宮津。

遅めの昼飯を食べ終えて、車に戻ろうと駐車場を歩く二人。伊根の後ろを歩く宮津が、不意に立ち止まり、

宮津 「……なあ」

と、伊根を引き留める。ポケットからキーを出そうとしながら振り返る伊根。

伊根 「んー？」

宮津 「……俺さ、これから色々変わると思う」

伊根 「おう」

宮津 「……今日の俺と、全然違う俺になったら、伊根は、どうする？」

伊根は宮津と対面するように向き直り、少し考えてから、

伊根 「ついてくよ」と言い放つ。

伊根 「どんな宮津になっても、俺はついてくよ」

宮津は力を入れて立ち尽くしたまま、

宮津「なんで、そう言い切れるんだ」

と尋ねる。伊根はちよつとうつむ

き、片方の頬を膨らませると

「ふっ」と息を吐いて、

伊根「お前が宮津だからだよ」

と言う。

伊根「宮津、さっき言ったな。『今日の俺

と、全然違う俺になったら』って、そ

れって、どんだけ変わっても宮津は宮

津だってことだろ。だったら……俺は

ずっと、お前についてくよ」

そう言われた時、海から吹いてきた

風が砂浜の砂を飛ばし、宮津の目に

当たる。

宮津「わっ……」

と小さく叫び、目を擦る宮津、一瞬

画面が暗転する。

目を開けると、モノクロの視界が鮮

やかな元の、色にあふれた世界に

戻っていた。(このカットからカラー)

Be-1のドアを開けて、宮津の方を見やり、

伊根「おい、もう行こうぜ」

と呼ぶ伊根。宮津はしぼしの間、呆然と世界を見ていたが、やがて、

宮津「……うん」

とうなづいて車の方へ歩いていく。Be-1のドアをしめ、駐車場を出て高速に戻っていく。

了